

高崎市文化事業広報誌

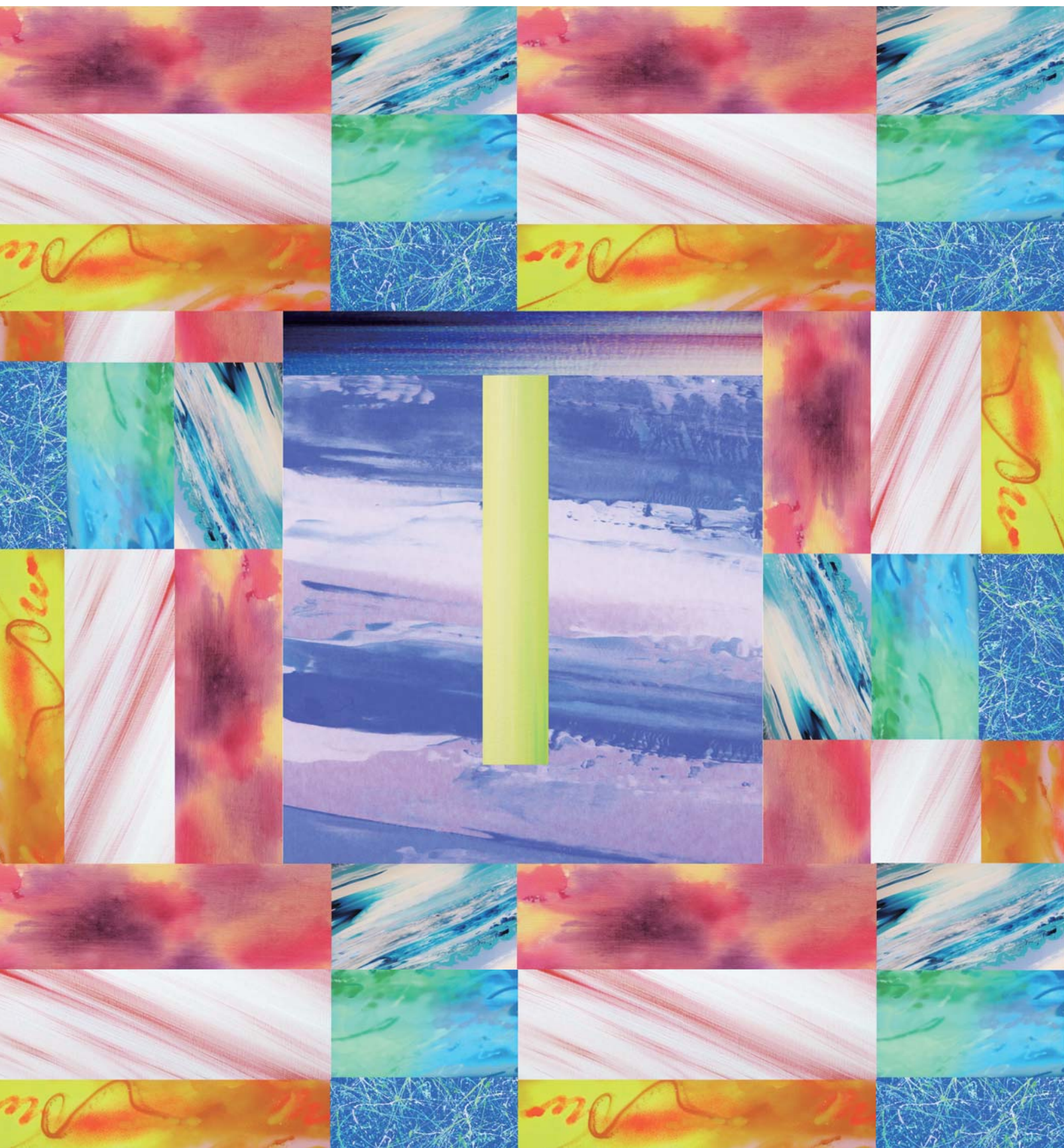
# 劇場都市

vol **02**

2017 AUTUMN  
Takasaki Cultural Event  
Information Magazine  
GEKIJOTOSHI

公益財団法人  
**高崎財団**  
The Takasaki Foundation

都市は劇場であり、劇場は都市である





都市は劇場であり、劇場は都市である

都市は、人生の喜怒哀楽が繰り広げられる舞台であり、都市そのものが劇場である  
そこで生まれる芸術文化は感動や創造性につながり、都市そのものを作っていく——  
「劇場都市」は、そこで生み出される文化芸術活動とそのドラマを紹介していきます

## Contents

### 2 Interview

高崎に5年ぶりの再来!!

佐渡 裕 新たなる挑戦

### 6 movement

劇場都市 高崎の物語

ときの高崎市民之を建つ

群馬音楽センターの碑文が物語るもの

### 8 Interview II

加藤登紀子

かまちに会い、

かまちを歌う

### 12 高崎財団 公演情報

～秋のコンサート情報～

裏表紙 MEET THE GSO

群馬交響楽団 楽団員インタビュー #02

チェロ首席奏者 柳田 耕治

◆表紙:「Untitled」 by JON JON GREEN・松岡洋太  
1978年高崎市生まれ。多摩美術大学美術学部卒業。2004年よりライブペインティングを軸に制作活動を開始。

# 高崎文化芸術センター<sup>(仮称)</sup> 2019年秋オープン予定



メインホール



メインスタジオ



小音楽ホール

音楽のある街高崎に、新たな劇場都市が誕生



SAITAMA



# 高崎に5年ぶりの再来!! 佐渡 裕 新たなる挑戦

クラシック音楽史上、二大傑作といわれる交響曲—『運命』と『未完成』。指揮者として成熟期を迎えた佐渡が今、これらの王道に挑む—なぜ『運命』と『未完成』なのか  
オーケストラにとっての指揮者とは  
自らも兵庫県立芸術文化センターの立ち上げから携わってきた経験から考える、地方オーケストラとホールの果たすべき役割とは  
世界で活躍するウィーン在住の人気マエストロ、佐渡裕の単独インタビューが実現。これを読めばあなたもきっと佐渡裕に会いたくなる!

©Takashi Iijima

## ベートーヴェン 運命

## 未完成

シューベルト

### 『運命』と『未完成』 黄金の二曲、今再び!

「クラシックの入門曲でありながら、一生聞き続けたい二大傑作です。おいしいお酒を勧められてお酒の魅力にはまるように、クラシックコンサートに行くきっかけになつてもらえれば」

そう語る佐渡裕は、特別な空間に取って、敷居をまたぐ喜びを味わってほしいと我々をいざなう。指揮者にとっても生付合つていく難曲に対峙し、「20代の時とは違う音にしたい」と決意する。

### 二大作曲家の相違と共通点

ジヤジヤジヤン

冒頭の二小節で聴衆の胸ぐらをつかむように始まる『運命』について「ジェットコースターのように



佐渡裕愛用の楽譜「運命」と「未完成」

劇的な第1楽章、小川の流れるような第2楽章、ダンスするかのような第3楽章からファンファーレのような第4楽章へと展開する」  
と話し、聴く者を飽きさせないのがベートーヴェンであると説く。  
それに対し、静けさの中に動揺や激情を表しているというシューベルトの『未完成』は、「素朴なまでに同じメロディを繰り返して、美しさのスポットにフォーカスしていくような繊細さがある。美しい思い出を失わないように奏でる、まるで室内楽のよう」と表現方法の違いを話す。しかし、両作品からほとぼるの情熱は「どちらにも負けず劣らない」と強調する。

### 『運命』に見るサプライズ

佐渡の最新刊『棒を振る人生』指揮者は時間を彫刻する』(PHP新書)には興味深い逸話が多数がちりばめられている。(以下、ゴシック体は同書より引用)

ベートーヴェンは聴衆の心にサプライズを起こす天才だった。「運命」の冒頭は八分音符から始まる…あの曲は「ん(休み)、ジヤジヤジヤン」なのである。

指揮者は休符に向かって腕を振り下ろすため、振り下ろした瞬間、音は鳴らない。その分蓄積されたエネルギーが、衝撃的な「ジヤジヤジヤン」を生み出す。大胆にも佐渡裕は、そんな「ベートーヴェンをも驚かせたい」と目論んでいる。

…ベートーヴェンの書いた譜面は殴り書きのようだとにかく汚くて、五線譜から大幅にはみ出したり、余白にはところどころ赤鉛筆の大きな字でさまざま書き込みがある。感情のたかぶりにしたがって筆跡が変わつていき、どうしても書きたいという情熱に満ち溢れている。

ベートーヴェンの自筆譜(ファクシミリ版)に目を通すとき佐渡は「どんどんこの作曲家を丸裸にしているような気分になつてくる」という。

コンサートとは、二百年前に描かれた旋律を現代に蘇らせる、謂わば奇跡のような時間だ。

### 指揮者の役割

オーケストラの指揮者の役割について、だんじり祭り(大阪岸和田)に似ていると佐渡は言う。だんじりの上で扇子を持って華麗に



身長187センチ。鍛え上げられた体躯からダイナミックなタクトが振り下ろされる

舞い、士気を高めながらも冷静に進行方向を指示する。それは「いい音楽を作る」ために奏者の前に立つ指揮者の姿と重なるのだ。また、日本伝統の落語にも例える。羽織を身にまとい、手拭いと扇子を携え高座に上がり、見事な話芸で観客を引き込んでいく噺家。確かに、燕尾服を身にまとい指揮台でタクトを振りながら音を紡ぎ、ホールをひとつにする指揮者によく似ている。

「音は空気の振動です。ですが、指揮者がテンポや強弱を演奏者へ伝え、演奏者から客席へ、客席から舞台へと気の循環が起これるとき、素晴らしい音楽へと変わるので」

指揮者が手を上げればスタート。右手で拍子をとる、左で強

弱、手の平を見せてノー、逆にしてウエルカム。エネルギーを高めるように拳を掲げ、手を上げれば陽、たれば陰といった表現体系はある。

が、「指揮者は人が好きでないといけない」と断言する。「考えの違う奏者80人、天使も悪魔もいる中でなかなか一致団結は難しい。そこで、楽譜という共通言語を基に指揮者のリードで同じ方向に向かっていくのです」

### この曲を届けたい

そのために、指揮者はひとり楽譜を読み込む時間に没頭する。作曲家のメッセージを感じ、自分なりにどう仕上げるか、その思いを演奏者に伝えるためには、譜面は必然的に、赤や青の





ひと目で、どんな音を出すかイメージできるように読譜の過程で赤、青、黒で書き込まれていく

変わるのだという。

### 佐渡裕の豊かな感性

五ヶ国語を操る佐渡だが、海外オーケストラを前にしたとき、思い描く曲のイメージを的確に伝えるには工夫がある。例えば、チャイコフスキーの『交響曲第五番』のリハーサルを迎えた、フランスでのこんなエピソードが素敵だ。

：第三章の最後で、クラリネットとファゴットがテーマに合いの手を入れるかのようなパッセージがある。そのところを僕は「チヨコレートがバラバラと降ってくるみたいに鳴らしてほしい」と表現した。

翌日、リハーサルに向かうと佐渡の譜面台に、「バラバラと降ってきたようにチヨコレートがいっぱい置いてあった」。こんな粋な計らいに、思わず顔がほころんでしまう。

クラシック音楽は難しい顔をして音楽教室で作られているわけではない。我々聴衆も、肩の力を抜いて音楽を楽しめばいい。



佐渡裕愛用の指揮棒  
右から、小学校時の合唱の先生から頂いたもの。ベルリンフィルを振った時のもの。左2本は、普段用のもの。持ち手はコルク製、好みの長さにしてある。指揮者によっては持たないし、あるアメリカの指揮者は、日本の菜ばしを使っている人もいるというほど、決まりはない。

一方、海外での客演公演は、毎回「オーデインションを受けているかのよう」だと、厳しい世界に立ち向かう孤高の姿も見せる。最初のリハーサルは「ファースト・コンタクト」と呼ばれ、緊張の出会いとなる。

：非常に繊細で集中力を要する時間でもある。指揮者はそこで曲に対する独自の解釈と統率を示さなければならない。最も重要なのは、曲に対する自分のイメージを演奏家に伝えるコミュニケーションのあり方だ。

そんな時こそ、佐渡の感性はより光る。職人ともいえる演奏者に、音をどう短くし、長くするか、テンポはどのくらいか伝える。

なければならぬ。

音の鳴らし方を言葉

で求める場合、たとえば「悪魔のような音がほしい」「賛歌のように吹いてくれ」「もっとフレッシユな音にしてほしい」…あるいは「そのアクセントは、レモンを切って、そのしびきがパーッと、こちらにかかるくらいの強さがほしい」とイメージを伝える。

豊かな表現で、強弱やタイミシグを伝え、演奏者の心をぐいぐいつかみ、佐渡裕の世界を創り上げていく。

そんな佐渡の父は数学教師だ。「父は冷静沈着、理路整然と話すタイプ。ピアノ教師の母は自由奔放で感性の人。私は両方バランスよく引き継いでいるんじゃない。

が、愛され続ける条件だ。

### 名門オーケストラと共に

ドイツの90%もの楽団を指揮している佐渡だが、中でもケルンは縁があり、ベートーヴェンの『第九』で日本ツアー(2014年)を共にした思い出の多い楽団である。息のあった演奏が楽し

みだ。「ケルンの人たちは、わが町のオーケストラに誇りを持ち、楽団側も多彩なプログラムで楽しませてくれます。ドイツ的な伝統がありつつ、様々な曲に対応する柔軟性を持ちあわせ



ケルン放送交響楽団  
ヨーロッパの最も重要な放送交響楽団の一つとして世界的に知られる。1947年WDR(西部ドイツ放送協会)開局と同時に発足し、今年創立70周年。



指揮者人生とオーケストラの世界を熱く楽しく語ってくれた

「ドイツのオーケストラとツアーをしています。これからマーラーやブルックナーをやると考えると指揮者として原点に戻ろうという気持ちです」

### 華麗なる指揮者人生、原点回帰

その音がほしければ、指揮台の上で何をしてもいい。そう言い放つ佐渡らしいダイナミックな指揮者像はこうして育まれていった。

子どもの頃から好んで聴いたドイツ音楽に、ドイツのオーケストラとがつつり向き合いたい」と初心に帰る思いだ。

2015年、音楽監督に就任したウーレン・トーンキュンストラ管弦楽団との契約は2022年まで更新され、来年一月には、アメリカの名門オーケストラ、シカゴ交響楽団への客演も決まっている。56歳でのアメリカデビューだ。

「指揮者として、死ぬまで立ち続けることは確かでしょうね」数々の夢を実現させた煌びやかな指揮者人生の先には、まだまだ見果てぬ世界がある。

### 音楽文化の充実したまち、高崎

「忘れもしない2010年の夏だったかな。群馬音楽センター

周囲の住民や商店街にひとつひとつ挨拶に行き、理解を求めました。今では、近隣の都市からも大勢の人が訪れる誇れるホールになりました。やはり住民の支えがあつてこそですね」恒例のオペラでは市民参加の前夜祭が賑やかに行われている。住民の日常に溶け込んだホール、夢を育む仕掛けのあるホール、そんなホールであり続けること

### 佐渡裕指揮 ケルン放送交響楽団『運命』『未完成』

【日時】  
2017年10月28日(土)14:00開演  
【場所】  
群馬音楽センター  
【演目】  
ワーグナー:ジークフリート牧歌  
シューベルト:交響曲第7番口短調 D.759「未完成」  
ベートーヴェン:交響曲第5番八短調 作品67「運命」  
【料金】  
全席指定/消費税込  
S席 14,000円(友の会:13,000円)  
A席 12,000円(友の会:11,000円)  
B席 10,000円  
(友の会:9,000円、U25:3,000円)  
【お問合せ】  
群馬音楽センター 027-322-4527  
\*未就学児のご入場はご遠慮ください。  
\*U25は公演当日25歳以下の方が対象です。



# ときの高崎市民之を建つ

## 群馬音楽センターの碑文が物語るもの

映画「ここに泉あり」が  
音楽センター建設への風となり  
市民運動が動き出す

終戦後まもない昭和20年(1945)11月、市民の心に灯りをともそうと高崎市民オーケストラ(群馬交響楽団)が設立され、その中心となった井上房一郎と丸山勝廣が群馬音楽センター建設にも深く関わった。

映画「ここに泉あり」の撮影が始まって間もない昭和29年9月、ラ・メゾンでコーヒーを飲んでいた丸山は、東京に国立劇場を建設する新聞記事に目を止め、地方文化のため高崎に2千席の音楽ホールを建設しようと決意したという。当時、県内には前橋市に群馬会館があるだけで、しかもホールとしてはステージが狭く設備も不十分だった。

この時に概算した音楽センターの建設費用は2億数千円。市の年間予算が8億円の時代で、建設は夢と思われたが、昭和30年の早春、丸山は高崎市内からも募金の反対運動が起きた。

**レーモンドの設計変更で用地問題  
高経大が移転し二中学校舎を新築  
国・県の補助金も大幅に減額**

音楽センター建設は市民運動としてスタートしたこともあり、予算の裏付けに乏しく、市債として多額の借金が懸念され、議会や区長会は市を激しく追及した。

レーモンド氏が示した最終案の設計で、音楽センターが隣の二中の校庭に大きく食い込むことになり、二中移転問題も勃発、突然の話にPTAは猛反発した。市は、隣接の市立高崎経済大学を移転させて二中の校庭にし、二中



▲現在は使用されていない引き割り緞帳(レイモンド原案)

役所に高崎青年会議所など各団体に集まってもらい、市民運動の寄付で建設を盛り上げていこうと提案、音楽センター建設運動に火を点けた。昭和30年2月に公開された映画「ここに泉あり」の勢いに乗り「音楽センター建設運動」が市民の中に広がっていった。

**昭和30年代に集客都市をめざした  
高崎の都市戦略  
それが群馬音楽センター**

音楽関係者にとどまらず、高崎の都市機能としてホール建設が求められ、首都圏から集客する役割を担うとした論調が強まった。関東と信越をつなぐ商工業都市として発展させてきた近代高崎人の進取の精神もあった。

そうした中、昭和30年春の市長選で、「前橋市にあって高崎市にない」大集会所の建設を行い、全国規模の集会所を高崎で開くことを公約の一つに掲げた住谷啓三郎が市長に初当選した。前橋市とのライバル心も伴い、明治期の

校舎も新築することで収拾した。

建設運動が始まってから4年目の昭和33年1月、市が示した最終的な予算で、国補助はたった100万円、県補助2700万円、1億円のあてが大きくはずれた。市は運良く市民から寄付された土地の売却金なども投入して寄付金を5千万円から8千万円に引き上げ、総額約2億5千万円の予算を立てたが、市議会は納得せず、寄付金を1億円にして、市の負担分を縮小するよう修正した。市は当初の倍額の寄付金を集めなければならなくなった。また、土地の提供をめぐる国との問題がもつれて市も右往左往、市民もあきれて寄付をやめようかという動きも出てきた。

住谷市長を知る市職員OBは「殿様のような市長だった」と述懐するが、音楽センターについては、殿様が頭を下げて回ったという。高崎市職労が募金を決定すると市長は組合幹部に対して畳の上に正座して深々と頭を下げたという。

**建設工事の入札は3回不調  
建築費は約3億5千万円**

「音楽センターは井上工業が建築したこととはよく知られているが、当然のことながら入札により決定された。しかし、市の予定額が低く、入札は不調が3回続き、最終判断が住谷市長に任された。レーモンドの設計は、市の予定額で

県庁争奪戦まで持ち出されて建設の機運が高まり、住谷はこの流れを巧みにつかんだ。

市民に理解してもらうため目に見える設計モデルが必要となり、井上房一郎が知己のアントニン・レーモンドに依頼、音楽センターの模型が制作された。井上が要望した「音楽だけでなく、古今東西の古典的な演劇公演も可能なホール」とするため、レーモンドによって昭和30年に第2案まで作られ、最終案となる第3案が設計されたのは2年後となる。丹下健三とレーモンドの共同設計も丸山は検討したそうだ。

**市民の大論争の中で  
募金運動がスタート  
反対運動も起きる**

丸山勝廣は建設運動と並行し、財政難の群響立て直しと音楽センター建設に国の補助金を引っ張ってくる戦略として「音楽モデル県」構想を文部省に働きかけ、昭和31年6月に指定認可に

は無理とささやかかれ、市民に動揺が広がった。募金から2年間、いったいどうなっているのかと不信が募る中、市は建設費を3億円超に増額、昭和34年6月5日に井上工業と仮契約し、8日に建設現地で地鎮祭を行い11月に着工した。建設費約3億5千万円には市民の一般寄付3500万円が含まれている。

**「ときの高崎市民之を建つ」  
碑文に託した住谷と丸山の信念**

昭和36年7月、音楽センターが完成したとき丸山は住谷市長に記念碑を建てるよう進言し「ときの高崎市民之を建つ」という言葉を伝えたという。

群馬音楽センターの建設費の1/3の約1億円は市民募金で賄い、それが「ときの高崎市民之を建つ」の碑文につながったと語り継がれているが、町内会を通した一般市民からの募金活動で集まったのは、実際は3500万円であった(特定寄付を含め約1億円)。

しかしながら、公共の音楽ホールの建設費の一部が市民の募金運動により賄われたことは全国的に稀なことで、高崎という街の特質や先進性と市民の情熱が大きな役割を果たしたことは事実である。一方募金運動には批判的な声があったことも忘れてはならない。

このように音楽センターは、順風満帆に完成したのではなく、大紛糾の中で様々な問題に直面しながら建設され

漕ぎつけると建設運動が大きく動く。

高崎青年会議所が大会を開いて火ぶたを切り、住谷市長の呼びかけで「音楽センター建設促進委員会」が発足。市内に横断幕やポスターが設置された。

一方、音楽センター建設に対する反対や誹謗も激しくなり、丸山は運動の第一線から一時、身を引いた。

昭和32年、市は音楽センターの建設場所を国有地の引揚者住宅・高松寮に計画し、建設費は2億円を予定。国・県の補助金が5千万円ずつで合計1億円、市の負担が5千万円、残り5千万円を市民募金とし、一般募金3千万円、有志による特別募金2千万円とした。

一般募金は一世帯あたり1200円、2万8千世帯が「月にピース1箱分の50円を2年間寄付してもらえば目標額になる」と算出し、市は区長会を開いて正式に募金を依頼したが、金額の算定や責任問題でかなり紛糾したという。その後、市長が先頭に立って百数十回にわたり各町内で説明会が開かれるが、クラシック音楽への理解は低

た。音楽センターの建設は市民運動を基調に推進されたのであるが、その建設過程において、議会と市長、市民世論の二分化等々の対立を生みだした。

住谷市長と丸山勝廣は「ときの高崎市民之を建つ」の碑文を建てる事により、市民間の対立や感情の纏れを癒し、昇華させようとしたのだ。そして音楽センター建設の意義を高らかに宣言することで、未来に向かって新しい高崎を創造していく「高崎のまちと市民の精神的な拠り所」にしようとしたのであった。

そして、音楽センター建設から56年経った今もこの言葉は生き続けている。



群馬音楽センター前に建つ「ときの高崎市民之を建つ」の碑▶



# 加藤登紀子

## かまちに出会い、かまちを歌う、



私は特にこの表現が好きです。

ただ、自分の生き方を貫く、  
それひとつだけのために。  
おまえは裸、  
たったそれだけ、  
おまえの心しかこの世にはいない

山田かまち作「生きる」より抜粋

才能あふれる幾多もの絵画や詩文などを遺しながら、17歳で早世した天才アーティスト・山田かまち（1960年7月21日-1977年8月10日）。

あれから40年目の夏、歌手・加藤登紀子がかまち最期の詩『生きる』に新たな息吹を吹き込む――

山田かまちが衝撃的な死を迎えるわずか10日ほど前に書かれた彼の詩『生きる』。自分を鼓舞するかのような熱いメッセージが込められたこの詩は彼の代表作であり、高校の教科書に掲載されたこともあります。

昨年、高崎市山田かまち美術館を訪れ、その生き様に感銘を受けた歌手加藤登紀子さんがこの詩に曲を付け、CD化（編曲・千住明）することが今年7月3日発表されました。くしくも、かまちの生まれた7月21日に、タゴスタジオ高崎でレコーディングが行われ、曲は、今年の高崎音楽祭で、大友直人指揮・群馬交響楽団演奏で初披露されます。

かまちとの運命的な出会いと今、CD化する想いについて、加藤さんに聞きました。

できたと思います。

**自分と向き合い、自分らしさを追い求めて**

――なぜ、「生きる」だったのでしょうか。

若い人たちが今、「夢を持ってなくなった」と言われています。小さいころから能力主義を求められ、失敗が許されないというプレッシャーに萎縮してしまう。この曲を送り出したいと強く思った理由は、ここにあります。

かまちが生きた1960年代はすごくエネルギーが満ち溢れた時代でした。日本全体が新しい時代を創ろうと燃えて。

私は、たとえ時代が違ってても、若い人にはかまちのように人生を最大限に燃焼して生きてもらいたい。自分が思うことや体からあふれるものを思い切っ外に表現して弾けてほしい、そう思っています。

若者に「自分らしく生きなさい」と言うのは簡単ですが、その押しつけられた「自分らしさ」が逆に若者を苦しめている。

「生きる」の中で、かまちは、悩みなながらもまっさらな気持ちで自分と向き合い、自分らしさを追い求めようとしています。それが強いメッセージを生んでいるのです。

時で明日につながっている。

かま



昨年5月、高崎市山田かまち美術館にて



フリーズ・ミスター・ポストマン

**ほとばしる思いを歌いたい**

――かまちとの出会いは昨年5月でした。

そうですね。昨年、高崎で行ったコンサートのリハーサルの際に高崎市山田かまち美術館を訪れたのがきっかけでした。

彼の才能は今なお輝き続けていて、絵はもちろん素晴らしいのですが、膨大な言葉や詩がとても印象的で、このほとばしる思いをなんとか歌にできないかと思っただけです。

高崎からの帰り道、『17歳のボケット』（集英社）を読みふけり、彼が最後に遺したという詩

「生きる」は、直感的に「歌になる」と感じました。私はせっかちな性格なので、思い立ったら止まらず、その日の夜から数日のうちに曲の第一案をデッサンしました。

歌詞が先にあつて、曲を後から作る場合、字数を調整したり内容を変えたりするのですが、この曲はほとんど詩を変えることなくリズムに乗せることができました。

あまりに順調なので「どうなっているんだ、うまくいっちゃうじやないか!」という不思議な感覚でした。私自身、かまちと同じ17歳の気持ちになって、彼と対話しながら曲を作り上げることが



# 生きる 山田かまち

かまち、  
おまえは、  
人に好かれるか好かれないかということで、  
生きているのではなかったはずだ。  
おまえは、生きる。  
ただ、自分の生き方を貫く、  
それひとつだけのために。  
おまえは裸、  
たったそれだけ、おまえの心しかこの世にはいない。  
おまえの生き方を貫く、  
消えるまで、生命が消えるまで、  
全ての力を出し切って、生きる。  
それがおまえの生き方だ。  
おまえの生き方をたぬけ、  
それは意地ではない。  
美しさだ。  
今までは人の言うことを聞きすぎた。  
みじめな気持ちになり、  
仲間が欲しくなり、  
ろくでもないやつを、  
仲間だと思いつむ。  
そこからおまえがくずれてゆく。

かまち  
おまえは自分をもっと大切にしろ。  
激しく美しく生きろ。  
みせかけや、その時のいくじなしなみじめさは、  
軽く、安いものだ。  
激しい美しさ、真の叫びこそが美しい。  
くだらん連中に妥協するな。  
おまえにはおまえがある。  
人のことは考えず、  
自分の生き方をたぬけ、  
輝く激しさだけを信じろ。  
今を信じろ。  
自分を信じろ。  
ただその燃える一本の生命を信じろ。  
おまえは美しい。それは誰がなんと言おうと、  
変わることはない偉大な真実だ。  
人に悲しまされるな。  
物事に悲しまされるな。  
おまえは生きることを生きる。  
おまえは再びおまえをつかめ。  
おまえは眠っていた。  
それをやり起こして、  
さあ、再びおまえを生きるんだ。  
再びおまえを！  
妥協は敵だ。  
おまえはおまえしかないのだ。  
おまえがおまえでなくてどうする！？  
おまえは生きることを生きる、  
昔を想い出せ！

1977.7.29



## 山田かまちの詩 生きる 加藤 登紀子



■「生きる」  
作詞 山田かまち  
作曲 加藤登紀子  
編曲・指揮 千住明  
演奏 群馬交響楽団  
ピアノ 鬼武みゆき

■「愛する者はくじけない」  
詩 山田かまち  
朗読・作曲 加藤登紀子  
ピアノ 鬼武みゆき

¥1,500+税 TRCS 0024  
発売元/TOKIKO RECORDS 制作/高崎音楽祭、ラジオ高崎  
録音/TAGO STUDIO TAKASAKI 2017.7.21



右より千住明さん、加藤登紀子さん、  
かまちの母・山田千鶴子さん  
(高崎市文化会館にて)

私は特にこの表現が好きです。  
ただ、自分の生き方を貫く、  
それひとつだけのために  
おまえは裸、  
たったそれだけ、  
おまえの心しか  
この世にはいない  
若者たちがこの歌を聴き、詩  
を知って何を感じるか、とても楽  
しみですね。  
—高崎への想いをお聞かせくだ  
さい。  
この曲ができてすぐに、「高崎  
のまちで、高崎の皆さんに曲を  
仕上げてもらいたい」という思い  
が強くなりました。このまちは  
音楽を根付かせ、育てようとい  
う気持ちを熱く持っているまちだ  
からです。  
今年の高崎音楽祭では、千住  
明さんの素晴らしいオーケストラ  
アレンジの下、群馬交響楽団と  
共演します。この機会に『生き  
る』をぜひ歌いたい。  
指揮者である大友直人さんと  
も相談して、9月10日のコンサ  
ートの大事な一曲にしようというこ  
とになりました。高崎でのレコー

ラジオ高崎  
開局20年  
記念

山田かまち(1960-1977)  
あふれるエネルギーと感性「生きる」

【期間】2017年10月7日(土)~10月15日(日)  
【会場】高崎シティギャラリー 第1展示室 ※入場無料  
【問い合わせ先】ラジオ高崎 TEL:027-322-5555

本展覧会では、今も感動を与え続ける山田かまちの  
絵画作品や代表的な詩文、写真、愛用品などを展覧す  
ると共に、1977年の高崎市内の写真を展示し、当時  
を振り返りながら、山田かまちの魅力を紹介します。

ディング、コンサート当日のCD  
発売と、本当に嬉しく思います。  
—ファンの皆さんへメッセージ  
をお願いします。  
いろいろな人に『生きる』を歌っ  
てもらいたいと思っています。特  
に高崎の合唱団や中学生、高校  
生に歌ってもらいたい。そして、  
世代をつなぐ架け橋のような曲  
になれば、この上ない喜びですね。  
—加藤さんとかまちのコラボレ  
ーションで生まれた新たな『生  
きる』が、メッセージとなって  
若者に伝わると思います。ま  
た、10月には高崎シティギャラ  
リーで「山田かまち展」が開催  
されます。これを機に多くの人  
にかまちの世界に触れてほしい  
と思います。本日はお忙しいと  
ころ、ありがとうございました。



ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンド



五本の木



青い自画像



## フランス発の新生代カルテット、Classic/Jazzの自在すぎる変容 エベーヌ弦楽四重奏団



©Julien Mignot

エベーヌ弦楽四重奏団は研ぎ澄まされたサウンドで世界中の室内楽ファンを熱狂させるカリスマ的カルテット。難関のミュンヘン国際コンクール優勝という経歴からその実力は十分に伺えますが、正統なクラシック作品からジャズまでを自在に弾きこなすステージは圧巻です。

2017年10月12日(木) 14:00開演 (平日午後公演)  
会場/高崎シティギャラリー・コアホール

Ⓧビエール・コロンベ、ガブリエル・ル・マガデュール(ヴァイオリン)  
マリー・シレム(ヴィオラ)、ラファエル・メルラン(チェロ)

Ⓨモーツァルト/弦楽四重奏曲第15番 二短調 K.421  
ベートーヴェン/弦楽四重奏曲第11番 へ短調「セリオソ」Op.95  
セルニアス・モンク、チャールズ・ミンガス ほか Jazz作品を予定  
料 全席指定 5,000円(友の会4,700円)

## 「神秘のピアニスト」によるバッハ&シューベルト アンリ・バルダ ピアノ・リサイタル



©Jean-Baptiste Millot

19世紀ヨーロッパの伝統を受け継ぐピアニストと評されるアンリ・バルダは過去に日本での演奏が少なく、入手できる録音もほとんどないことから「神秘のピアニスト」とも呼ばれます。そんな彼によるリサイタルは日本で初めて披露するバッハとシューベルト作品。76歳を迎えるバルダはどんな表現に挑もうとしているのでしょうか。

2017年11月2日(木) 19:00開演  
会場/高崎シティギャラリー・コアホール

Ⓧアンリ・バルダ(ピアノ)  
ⓎJ.S.バッハ/平均律クラヴィア曲集第一巻より  
シューベルト/4つの即興曲 Op.90、Op.142  
料 全席指定 4,000円(友の会3,700円 U25 2,000円)

## リコーダーの女王と日本人名手によるモーツァルト ミカラ・ペトリ リコーダー&弦楽三重奏



©Peter Olesen

バロック音楽のための脇役に過ぎなかったリコーダーを芸術の域にまで高めたとされるミカラ・ペトリ。稀代の天才奏者による待望の来日公演では、日本が誇る室内楽の名手とともにモーツァルト、ヴィヴァルディの名品を奏でます。

2017年11月14日(火) 19:00開演  
会場/高崎シティギャラリー・コアホール

Ⓧミカラ・ペトリ(リコーダー)  
岡本誠司(ヴァイオリン)、朝吹園子(ヴィオラ)、懸田貴嗣(チェロ)  
Ⓨモーツァルト/フルート四重奏曲(リコーダー版、全4曲)  
ヤコブ・ファン・エイク/ロバート王子のマスク、  
「笛の楽園」第1巻 第49曲「今夜は何をしましょうか」  
ヴィヴァルディ/リコーダー協奏曲 八長調 RV443  
料 全席指定 6,000円(友の会5,500円 U25 3,000円)

※U25料金は公演当日25歳以下が対象です。

新たな名演の瞬間を今こそ!

## 佐渡 裕 (指揮) ケルン放送交響楽団 「運命」&「未完成」

欧州屈指のオーケストラによる新たな名演が生まれる瞬間に立ち会えるかもしれません。ケルン放送交響楽団は名門オーケストラがひしめくドイツにあって、常に世界中の音楽ファンから注目を集める存在。1947年の創立以来、名だたる巨匠らと数々の名演をその歴史に刻んでいます。

この秋の来日公演でこの名門を率いるのは音楽界の第一線で躍進を続けるマエストロ、佐渡裕。

ベートーヴェンの「運命」とシューベルトの「未完成」という交響曲史上の二大名曲を据えたプログラムからもマエストロの日本でのステージに対する熱意がみなぎります。



©Takashi Iijima

2017年10月28日(土) 14:00開演  
会場/群馬音楽センター

Ⓧ佐渡裕(指揮)、ケルン放送交響楽団

Ⓨワーグナー/ジークフリート牧歌

シューベルト/交響曲第7番 口短調 D.759「未完成」

ベートーヴェン/交響曲第5番 八短調 op.67「運命」

料 全席指定 S席 14,000円(友の会13,000円)

A席 12,000円(友の会11,000円)

B席 10,000円(友の会9,000円 U25 3,000円)



©WDR.Mischa Salevic

## チケットインフォメーション

窓口 ●8:30-17:15 年末年始は休み

窓口	電話番号	定休日
群馬音楽センター	027-322-4527	月
高崎市文化会館	027-325-0681	月
高崎シティギャラリー	027-328-5050	なし
箕郷文化会館	027-371-7211	月・火
新町文化ホール	0274-42-9133	月・火
榛名文化会館	027-374-5001	月・火
吉井文化会館	027-387-3211	月・火
高崎市倉渕支所(地域振興課)	027-378-4522	土・日・祝
高崎市群馬支所(地域振興課)	027-373-2604	土・日・祝

※電話予約は発売日翌日より受付いたします。

## インターネット

高崎財団インターネット チケットサービス(発売日は13:00から)  
<http://takasaki-foundation.or.jp/syusaijigyou/>

平成  
29  
年度

「高崎市文化事業 友の会」  
会員募集中!

### 会費

新規会員 2,000円

継続会員 1,500円

\*前年度のポイントを引き継ぎます。

短期会員 1,000円

\*10月1日以降入会となります。

### 有効期間

入会日から

平成30年3月31日まで

★詳しくは、高崎財団HPをご覧ください

<http://takasaki-foundation.or.jp/>

★ツイッターでも情報発信中

@bds04884

### 主な会員特典内容

- チケットが特別料金で買える!
- チケットを優先して予約できる!
- お得な情報満載の会報「友の会便り」が届く!
- ためたポイントでチケットがもらえる!
- バスツアーに参加できる!



# MEET THE GSO

GUNMA SYMPHONY ORCHESTRA

群馬交響楽団  
楽団員インタビュー

Vol.2

脈々とつながれる70年の群響サウンド  
それを奏でる個性あふれるメンバーたち  
楽団員を知れば群響がもっと好きになる

群馬交響楽団 チェロ首席奏者

## 柳田 耕治

やなぎだ こうじ



人間の肉声に最も近い楽器  
チェロを通して自分の音楽を究める

### チェロに魅せられて

ピアノを教えていた母の影響で音楽に親しみ、小学2年でチェロを始めた柳田さん。「体が小さく、立って弾くヴァイオリンより座って弾くチェロの方がいいだろうと母の助言でした。実際はチェロの方が大きくて、弾くのに力があるのですが」と明るく笑う。しかし、人間の肉声に最も近い楽器と言われるチェロにすぐに夢中になった。

「男性のような低音から女性的な高音まで幅広い音域を奏で、まるで人が話すかのように演奏できるからです」今年6月の群響定期演奏会。柳田さんは、リストのピアノ協奏曲第2番で、チェロのソロパートを演奏した。高崎出身のピアニスト金子三勇士さんとの共演で、「自分の音楽を奏でられる貴重な機会」となった。楽譜をどう解釈し、自分の思いをどう音楽にするか。ソロ演奏は、大いなる醍醐味である。

### 感性に忠実なるチェリスト

1980〜1996年まで京都市交響楽団チェロ首席奏者を務め、その後、群響の首席に就任し、今年21年目となる。群馬の自然の豊かさを気に入り、小さな庭先で触れる植物の生命力にも感嘆する。その感慨は「人の心や自然、大宇宙を描く人類最高の文化遺産、クラシック音楽に通じる」と、自

身の音楽観を披露する。

「作曲家は偉大です。民族や言語、時代を超えた世界の宝であり、人類が滅亡するまで彼らの曲は演奏され続けるでしょう」

かつてベートーヴェンの激しさが好きだったという柳田さんだが、今はバッハやモーツァルトを好む。

「バッハは人間を超えた創造主、神のような高次元の世界を持ち、モーツァルトは理性と知性、ユーモアのバランスがよく、どんな心境でも受け入れられるのです」。長い音楽人生がもたらしてくれたのは、穏やかな境地だった。

そんな感性に忠実なチェリストは、趣味にも意欲的だ。テニスやスキー、カメラ、ヨットやラジコン飛行機もやった。一方「演奏家にとってこれで満足、という演奏はない」と言い切る。豊かな音楽の世界に導いてくれた母に感謝し、自身の音楽を追究する。

### Kouji Yanagida

- 出身 京都府 ■入団 1996年9月
- 最近の印象に残っているコンサート  
第529回定期演奏会(2017年6月17日)、  
リスト/ピアノ協奏曲第2番ほか
- 好きなアーティスト  
素晴らしい演奏家はたくさんいるが、年齢を重ねると「自分の演奏が一番好きになる」。頑固に自分の音楽を追究したい。
- 好きな作曲家  
バッハ、モーツァルト

次回はコントラバス首席奏者・市川哲郎  
さんを予定しています。お楽しみに！